



姉弟相姦

わたしの

おとうと

おれの

あねさん

# サンプル版

2

【 おれのあねき 】

『 姉、小百合…… 』

姉貴が台所に立て籠もって約二時間、台所からは本当に料理を作っているのか、疑問を生じかねない音が、姉貴の悲鳴ともども聞こえてくる。「こりゃ、姉貴の晩飯が出来るまで、まだまだ時間が掛かるな……」

商店街の福引に当たったと言って、両親が二泊三日の温泉旅行へと出かけたのは今朝の事、残されたのは俺と姉貴……そんな姉貴が、妙に張り切って晩飯を作っているのだが、姉貴の料理の腕は壊滅的に下手だ！以前に、今回と同じ感じで両親が出かけて、姉貴が晩飯を作ったことがある……それを一口喰った時に、俺は思わずその料理の素晴らしさに感動の声を出した……

『 芸術的な味付けでございました……しかも抽象画的な雰囲気を持つ、ピカソも顔負けのレベルで、後世に残るくらいの作品だと確信できるできばえだったと思うよ……お姉ちゃん……』とだ……

さすがに姉貴が一生懸命に作った料理なので『不味い！』と言う本音を、出来るだけオブラートに包んで（多分数百枚単位のオブラートに包んで）表現させてもらったのだが、返事は強烈な姉貴の鉄拳の一撃だった。

今回は、その時のリベンジとばかりに、妙に張り切って晩飯を作っているのだが、その晩飯が完成するまで、まだまだ時間が掛かりそうだった。

階段の途中まで降りていた俺は、回れ右をして自分の部屋へと引き返

す。

廊下を隔てた二つの部屋、その一つが俺の部屋で、残るもう一つが姉貴の部屋だ。俺は自分の部屋に入り、ドアを閉めようとしたが……何分にも古い家だと言う事もあって、ドアは完全に閉まらずに半開き状態となる。

「早く直してくれて言ってるのにな」

完全に閉まらないドアと、少々格闘した後には敗北を素直に認めて、少し隙間が開いたままとなっているドアを後にして、俺はベッドへとこりりと横になる……そして横になったまま、枕元の方へと手を伸ばしベッドの隙間に隠していた写真を一枚取り出す。

取り出した写真の中に居るのは……姉貴だった。

「姉貴……小百合……お姉ちゃん……」

俺は姉貴の名を呼び、軽い溜息をつく……写真の中の姉貴は、服を着ていない……去年の家族旅行の時に、ひそかに隠し撮りをしたお風呂に入ろうとしている姉貴の姿だ。

この写真を見ながら、俺は何回も自慰をし……妄想の中で、俺は姉貴を何回……何十回も姉貴とセックスをした……いや正確に言えば、俺は姉貴を妄想の中で、レイプし……犯し続けていた。

何時頃からだったろう……姉貴を肉親としてではなく、一人の異性として感じ、強烈な恋愛感情を抱くようになったのは？

写真もこれ一枚だけではない、他に何枚も似たような写真を隠し撮りしている……風呂上りの無防備な姿、パジャマを肌蹴て眠り込んでいる姿、下着姿で着替えをしている姿……俺は、そんな写真を何枚も持っているし、それだけではなく密かに姉貴の下着も何枚か失敬していたりする。





我ながら、とんだ変態の弟だと自嘲するしかない……自嘲しながらも、その行為を止める事ができない……出来なくなっている。

こんな調子だと、何時の日か俺は姉貴を本当に襲って、レイプしてしまうかも知れない……それは嫌だ！

そんな事をすれば、俺は姉貴に嫌われてしまふ。姉貴に嫌われてしまいうぐらいなら、死んじまつた方がマシだと思っている……だから俺は、こんな変態行為で自分の欲望を満足させ、本当に姉貴を襲ったりしてしまわないように、欲望を吐き出し続けるしかない……姉貴に気が付かない様にして……

手に取った写真……俺はその写真を眺めながら、何度目かの溜息をついた……

おれのあねき

【 おれのあねき 】

『 恋慕の果て…… 』

「この写真……」

そう言っただけで絶句する姉貴は、写真を凝視し続ける……息が詰まりそうな沈黙が、俺と姉貴の間に流れる。

「健太……この写真どうしたの、どうしてこんな写真を健太が持っているの……答えて、答えないと姉ちゃん本当に怒るわよ！」

どこか引きつった様な口調の姉貴の声、そしてベッドに押し倒したままの俺の顔を正面から睨みつけ、語気も荒く問い詰め始める。

「何とか言いなさいよ健太！ 何でお姉ちゃんのこんな写真を持っているの、こんな……こんな厭らしい写真を、健太が撮ったの！」

厭らしい写真……それは紛れもなく俺が撮った姉貴の写真……言い訳なんて出来る筈がない、俺は黙ったまま姉貴の視線から逃れる様に顔を背けた。

「どうして横を向くのよ、私の目が見れないの……違うとか、誤解だとか……言い訳しなさいよ、言い訳してゴメンナサイで、謝りなさい健太、どうしちゃったのよ！」

横を向いたままの俺の顔に何か……水滴がばたばたと落ちてくる……それは姉貴の涙だった。

「健太、どうしちゃったの……お姉ちゃんが嫌いな、健太何とか言つてよ！」

次々に顔に落ちてくる姉貴の涙、俺は何をしてしまったかを知る……



「健太のばかぁ！」

姉貴の悲しげな声、そして顔に当たる姉貴の手……痛くは無い……だけれど痛かった……心がとても痛かった……そして俺は、その心の痛みに耐えることができなかった。

俺を叩き続ける姉貴……横へと向けていた顔を、姉貴の方へと戻す……泣きながら俺を叩いている姉貴の姿……その姿が途轍もなく悲しげでいながら、ぞくぞくするほど魅力的に見えた……その瞬間に、俺の中の何かが切れる音が聞こえた様な気がした……

「きゃぁ！」

俺はベッドから起き上がると、姉貴の手を掴んで入れ替わりにベッドの上へと押し倒す。

「いたぁ……なにをするのよ健太、退きなさいよ、手を離しなさい！ 健太、早くどけな……！」

暴れる姉貴を俺は押さえつける……俺を見る姉貴の顔が一瞬凍りついた様に強張り、次の瞬間に明らかに恐怖の表情を浮かべる。

そんな表情を見せる姉貴……姉貴は俺の顔に何を見たのだろう？身の危険を感じるほどに恐ろしい顔だったのだろう。

「やめて……健太……おねがい、やめて……」

姉貴の声が震えている……その声を聞いた時に、俺の中に潜んでいた獣は、俺の理性の檻を突き破り、姉貴の前に姿を現した。

「やぁ、やめてえ、健太おねがい、おねがいだからいやぁ……！」

手加減の無い力で、俺は姉貴をベッドへと押し付け組み伏せる。

「放して、手をはなして健太、おねがいだから、私達は姉弟なのよ、正氣に戻って健太、御願いだから、やめてえええ！」

俺の下に組み伏せているのは、既に姉貴ではなく……一人の女だった。恋焦がれ、何度も夢にまで見て、その姿を夢想し続けた女……



おれのあねき

【 おれのあねき 】

『 尽きぬ欲望…… 』

「どうして……どうして私が、こんな目に合わなければならないの、何か私が健太に悪い事でもしたの？ それだったら、お姉ちゃん謝るわよでも……でも……でも、こんな酷い目に合うような事を私がしたの、教えてよ健太！ 早く教えなさいよえ！」

奇妙な虚無感……姉貴の中へと、想いと欲望を吐き出した終えた俺は、泣いている姉貴の身体の上から離れる。

俺の拘束から解放された姉貴は、犯された姿のままベッドに突っ伏して泣き続けている……捲り上げられたままのセーター、そのセーターから露出している乳房を隠す役目を放棄している外れているブラジャー、引き摺り下ろされたショーツは左足首に纏わり着いたまま……そんな姿で、姉貴は泣きながら俺に問い続ける……どうして！ なぜなの！ 教えて！ ……と、姉貴は知リたかったのだろう……どうして俺が、自分をこの様な目に合せたのかと言う事を……自分が憎くてしたのだろうか……自分の事が嫌いになったのだろうか……たとえどの様な酷い答えであつたとしても、姉貴は俺の口から答えを聞きたかつたのだろう……だが、そんな姉貴にたしうる俺の答えは違っていた。

いまだ半裸の姿のまま泣き続けている姉貴……その姿に、俺は再び激しい欲望を感じ始めていた……そうだ……すでに一度したんだ……二度も、三度も……同じ事だ。





俺は欲望をたぎらせ……その欲望を下半身のペニスへと集中させ……泣き続けている姉貴の方へと近寄っていった。

「やめて、私に触れないでえ……触れられただけで寒気がするわ、私に触れないでえ！」

姉貴の肩に手をかけた時に、その肩にかけた手を姉貴は拒絶した。もしかしたら、昔の様に……子供の頃の様に、俺がゴメンとも言いながら慰めるとでも思ったのだろうか？

「触れないでって言ったでしょう！ なにを……これ以上なにをしようというの健太、もつしたんでしょう、終わっただんでしょう、だから満足したんでしょう、だったら私に構わ……いやあ、なにを、健太やめてえ！」

拒絶された手を、俺は再び姉貴の肩へと触れさせる……泣いている姉貴を慰める為ではなく、わきあがり続ける欲望を満たす為に……俺は、泣いている姉貴の腕を掴んで強引に引き起こし、そのままベッドの上へと強引に押し倒した。

「やあ、やめてえ、これ以上なにを……もう終わっただんでしょう、だめえ、いやああ、もういやああ……！」

セーターを完全に脱がして、ずり上がったままのブラジャーから露出している乳房を揉む……白くて柔らかな姉貴の乳房、その姉貴の乳房を先程と同じ様に……いや、それ以上の執拗さで、俺は姉貴の乳房を蹴りつづけた。



おれのあねき